

自分1人幸福になっても仕方がない

16年前の正月、東京の日本ユニセフ協会の友人がやってきた。「大阪にボランティアの基地をつくって欲しい、資金はゼロ、だという。元大阪市長の大島靖さんに頼んで旧堂島小の3階に部屋を借りた。

後にニューヨークから視察に来た国連の人が「世界で一番貧しい事務所」と折り紙(?)を付けてくれた。ボランティアは10数人、役員より少なかった。皆がコップ、湯沸かし、お古の水屋、机、いすを持ち寄った。「大阪にユニセフを溢れさせよう、表情だけは明るかった。昨年秋、関西の音楽家が創設15周年記念チャリティコンサートを開いてくれた。今、126人がボランティア登録している。

実は、私は、基地、ができたところで、新聞社を退職後に描いていた第2の人生、大学での研究生活を始めようとしていた。そんなとき急性膵炎を発病した。激痛、意識ははっきりしていた。医師の表情から危篤だと悟った。

死に際して人は一生を思い出すという。だが、私は60年間の何一つ思い出さなかった。「なんとつまらん一生だったか」という思いだけだった。1週間ほどたって医師の表情から助かるかもしれないと思った。「もう一度生きて病院を出ることができたら、死ぬときに、生きた、と思い出すことのできることをしよう」。

*

手帖にこんなメモがある。

「人間はなんのために生まれてき

ボランティア活動の日常化を



2016年11月25日、大阪ユニセフ協会15周年記念コンサート会場で、着ぐるみのアリス・ゴンタと一緒にボランティアの記念撮影

たのか。幸福になるために生まれた。しかし自分1人幸福になっても仕方がない。1人でも幸福になる手助けをするのが生まれてきた意義だ。」(瀬戸内寂聴) ▽「誰だって一大事が起これば奮い立つ。けれども、毎日のつまらないできごとに、笑いながらつきあっていくには、それこそ勇気がいると思います。」(『あしながおじさん』のジュディ) ▽敗戦の翌年、満員電車で座席に座った娘が、赤ん坊を抱いて立っている母親に「赤ん坊を抱かせてと申し出た。隣の紳士、が『なぜ席を譲らない』と激怒した。自分は席を譲る気はさらさらなく。「紳士は『善』を知っていると言えよう。けれども『善』を行えないたぐいである

う。」(原節子) ▽「禅とは料理することであり、庭を掃くことであり、いろいろの日常生活をするものだ。禅を学んで出世するものではない。」(中国・宗の禅寺で40年間典座だった僧の言葉。曹洞宗開祖の道元が『正法眼蔵随聞記』に)

昨年暮れ、80歳になった。今心掛けていること。朝起きて洗面して、食事をして、トイレに行って、その合間にイベント案内の上書き。ボランティア活動の日常化。私たちの活動の対象は、名前も顔も知らない世界の子ども。一瞬も気を休めずに、と気張ることはない。できるだけいい、と自分に言い聞かせている。

(古野喜政)

contents

活動フォトニュース.....	2
シリーズ この人に聞く 第8回 テラ・ルネッサンス・栗田佳典さん.....	4
活動紹介 ユニセフ学習の感想文.....	6
活動日誌(11月~1月).....	7